

春雨抄第一 (4)

和書門			
二〇	四	九	二七六一
冊	架	函	號
類			

内閣文庫			
二〇	二	二七六一	和書
函	冊	號	類
八	〇	一	
架	冊	號	類

内閣文庫	
番號	和 27681
冊數	20 ( 4 )
函號	202 181



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak 2007 TM: Kodak



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり  
綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり











1 1037 + 104 472026

1 1037 + 104 472026

1 1037 + 104 472026  
1 1037 + 104 472026  
1 1037 + 104 472026  
1 1037 + 104 472026

1 1037 + 104 472026

○ 1037 年 104 月 20 日 1037 年 104 月 20 日

1037 年 104 月 20 日 1037 年 104 月 20 日

○ 1037 年 104 月 20 日

1037 年 104 月 20 日 1037 年 104 月 20 日

1037 年 104 月 20 日 1037 年 104 月 20 日

1 1037 + 104 472026

1037 年 104 月 20 日 1037 年 104 月 20 日

1037 年 104 月 20 日 1037 年 104 月 20 日

1037 年 104 月 20 日 1037 年 104 月 20 日

1037 年 104 月 20 日 1037 年 104 月 20 日







○ とうりくを寺 大和葛城郡

後齊 くらげやちるる寺は秋の月舟に歌を歌をたみま 具念

五葉 去秋あつふ名所の春もさうまあちるる寺のつらあひの 入るち

後齊 かりあつらゆるもみこころうらまやちるる寺のそのの 後入

凡雅 くらげ山橋系よ月舟のふさそちるるの歸の言うあまの 大葉

或人言交内は有賢下時殿上人七八友お伴ひらうこ

らうそあそひり行次り田のわたりにおまじり堂さ

くれはかんと黒人あひく田このわら繁さひらう病

いしく是あんち寺とう昔感高句はたよ

志のく井といふ智あつ老人らえと相伴ひくはくは

池のせとく向新なるれい道こそ志の葉井とらひ

つこくこころ田のあつらわたりあつらへん入る目して

葛城と云号十返とらうこひくは詞りる

衣をせうのあつは花院してまこつら

土御門内大臣の家月又新依らう忠の清幸

もあつり會ま古寺の月と云号年

あつらうちるる寺の志のく井よあ感と云号月 内奉

是は又兼三位入道まこく感とらうこひくは

くらげあつらゆるあつらゆるあつらゆるあつらゆる

と大集したりト衝感しらすあつらゆるあつらゆる

あつらゆるあつらゆるあつらゆるあつらゆるあつらゆる

お定夜つあつ詠号り

一 くらげらり 里山地 ころり 縄 栲翁

まのあつらゆるあつらゆるあつらゆるあつらゆるあつらゆる







今更りしげのさき葉トヨセ子下つてはふもいしとて  
如世も縁スル方絶と常世の物必とて

常任 常世 常備

風吹くさきく浪に子更魚類水鳥のさき

年とゆきくもえりてさき思ゆるも雲のさき

山林のさき羽とてさき

さきとてさきお柳うけさきさきさきさきさきさき

津の國の紐波たきさき山城のさき

うさ風やさきさきさきさきさきさきさきさき

さきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

さきとてさきさきさきさきさきさきさきさき

さきとてさきさきさきさきさきさきさきさき

奥儀抄に常滑は字くさきさきさきさきさき

さきとてさき 常聖 幸せ

さきとてさきさきさきさきさきさきさき

松之台さきさきさきさきさきさきさき

さきとてさきさきさきさきさきさきさき

風霜のさきさきさきさきさきさきさき

さきとてさきさきさきさきさきさきさき

さきとてさきさきさきさきさきさきさき

さきとてさきさきさきさきさきさきさき

さきとてさきさきさきさきさきさきさき

さきとてさきさきさきさきさきさきさき

さきとてさきさきさきさきさきさきさき

さきとてさきさきさきさきさきさきさき



紅葉抄

一 山里

松尾くまを死しう死の書 体

山科の山乃の書は書きんくま死んくまの山乃の書

おひ出ると死の山乃の書は書きんくま死んくまの山乃の書

色みちあを死く山之下し麻のよのれ書も秋と

秋とつねに死く山之下し麻のよのれ書も秋と

わさみちのすめり色の山乃の書は書きんくま死んくまの山乃の書

一 ころり

とりのやらの書は書きんくま死んくまの山乃の書

恒吉の書は花とく仲代よのひく十の海くれ書は代

例る死書くまの山乃の書は書きんくま死んくまの山乃の書

とりの花とく松とくらみくりわさみちの山乃の書

一 ころり

とりの花とく松とくらみくりわさみちの山乃の書

一 ころり

とりの花とく松とくらみくりわさみちの山乃の書

常夏にの信くつ物 死

とりの花とく松とくらみくりわさみちの山乃の書

信くつと常夏にの信くつ物 死

とりの花とく松とくらみくりわさみちの山乃の書







一 ころは... 後

久方夫乃... 後

た園... 後

一 ころは... 後

白鳥... 後

白鳥... 後

白鳥... 後

白鳥... 後

白鳥... 後

白鳥... 後

白鳥... 後

白鳥... 後

白鳥... 後

白鳥... 後

白鳥... 後

白鳥... 後

白鳥... 後

白鳥... 後

白鳥... 後

白鳥... 後

白鳥... 後







ふりり出りり毛むらぶたの事しるる

毛の習ふるゆりたニリ 奥儀抄

毛の習ふるゆりたニリ 奥儀抄

はらひ出りてくる

日 羽場の末おふりてくる毛むらぶたの事しるる

羽のたよりを毛むらぶたの事しるる

はらひ出りてくる

○ 毛むらぶたの事しるる

鳥のけいひりてくる毛むらぶたの事しるる

鳥のけいひりてくる毛むらぶたの事しるる

○ 毛むらぶたの事しるる

日 毛むらぶたの事しるる

○ 毛むらぶたの事しるる

毛むらぶたの事しるる

毛むらぶたの事しるる

○ 毛むらぶたの事しるる

毛むらぶたの事しるる

毛むらぶたの事しるる

毛むらぶたの事しるる

○ 毛むらぶたの事しるる

毛むらぶたの事しるる

○ 毛むらぶたの事しるる

毛むらぶたの事しるる

○ 毛むらぶたの事しるる







海峽のほとりへはさしつゝのりてはるる松

のりてはるる松のりてはるる松

○ とうりのあや

ものねるあやのりてはるる松

すろりたるあやのりてはるる松

うねりたるあやのりてはるる松

水の上よはるる馬のりてはるる松

濱子馬のりてはるる松

宗徳のりてはるる松

よはるる松のりてはるる松

とて新法録

一 とうりるあや

あやのりてはるる松のりてはるる松

薪津のりてはるる松のりてはるる松

奥儀抄云薪津ははるる松のりてはるる松

病の林ははるる松のりてはるる松

似これのりてはるる松

鳥を山あやのりてはるる松のりてはるる松

あやのりてはるる松のりてはるる松

あやのりてはるる松のりてはるる松

あやのりてはるる松のりてはるる松

あやのりてはるる松のりてはるる松

あやのりてはるる松のりてはるる松



一とびつくとち歸

あつと朝遠里との花の雪栂

月夜 祿方の幸室とのまきとらふてあつとの松の勢うね

新納雅 任者の花のあつとまきとらふてあつとの松の勢うね

八景 あつとまきとらふてあつとの松の勢うね

一とびつくとち歸

うけつとまきとらふてあつとの松

あつとまきとらふてあつとの松の勢うね

秋とまきとのまきとらふてあつとの松の勢うね

一とびつくとち歸

月あつとまきとらふてあつとの松の勢うね

花らりとまきとらふてあつとの松の勢うね

天長 後にはあつとまきとらふてあつとの松の勢うね

一とびつくとち歸 十や甲別酒折ノ交て扱打

くまのころと紙丸おのまきとらふてあつとの松

十日あつとまきとらふてあつとの松の勢うね

この松はあつとまきとらふてあつとの松の勢うね

一とびつくとち歸 陸奥

新納雅 東海に十徳のまきとらふてあつとの松の勢うね

一とびつくとち歸 陸奥

あつとまきとらふてあつとの松の勢うね

陸奥のまきとらふてあつとの松の勢うね



史本云古格山家飛と云

嵐のこきろえぬたぬよしじまのこきろえぬたぬよし

足ふ奥列のこきろえぬたぬよし

信濃抄に十羽あつる鷹十のり又この七口を

奥列に有る十羽の部奥列に十

奥儀抄に奥列よりのこきろえぬたぬよし

一

一

西のこきろえぬたぬよし

東のこきろえぬたぬよし

北のこきろえぬたぬよし

南のこきろえぬたぬよし

モロモロト云

くらのこきろえぬたぬよし

まゆらもぬらぬのひんぎ

まゆらもぬらぬのひんぎ

まゆらもぬらぬのひんぎ

まゆらもぬらぬのひんぎ

まゆらもぬらぬのひんぎ

まゆらもぬらぬのひんぎ

まゆらもぬらぬのひんぎ

まゆらもぬらぬのひんぎ

まゆらもぬらぬのひんぎ



一とあり

さひらろ唐の末はなけさ  
さくら次隣之由乃さく  
あしきわり里んかう那  
枚あけ唐の隣つこふ  
さゆらにけうぬあさむさ  
ねとぬふらうみひ雲

まよ

互ひある草も今も霜うれれ秋のあり  
なをなさうらん

川集

在中之まは隣とありのまは  
互ひのありまはあ

新六帖

里乃新とありのまは  
なはらうあり

日

家乃新とありのまは  
なはらうあり

日

いふまんの隣は  
なはらうあり

○とありの笛

み着のむ乃わさうのまは  
なはらうあり

神中

○とありのふ

出さのかんさうじらう  
もま憐乃さうふあひのり  
尚

互云曉なうふゆる  
不徳依之年初あに  
嘯函

ミテホカフ之社も  
地乃カニ隣あり  
あひとあり

秘ひと出よと也

毛詩人疾道口  
我亦疾則禱言

神中

うら歎きさうひつ  
なとあひとあり

奥儀物云人の事  
と思ふ金りあひと  
其の事あり

一とあり 局櫃 亦能

旁に終の盤と  
備てぬ絶  
さうさうさうさう  
のち風女

秋にさうさうさう  
ぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬ



戸をひらきもみ山をたはな 花の香を神よ覚ゆる白ひ  
老の百を ころの山をたはなをの明しふるくはるひの秋のくはる風 忠孝  
浪の我 年をぬかり松のたけの枝をたはなをの明しふるくはるひの秋のくはる風 忠孝

○ 燈のりや ころのや

記の六 ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや

まよ ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや

○ 戸ひらき ころのや

みもあつめ家待りのかひも 巴

○ 戸ひらき ころのや

みもあつめ家待りのかひも 巴

金糸 山梯をたはなをの明しふるくはるひの秋のくはる風 忠孝

一 ころのや

たりみる雲の光をたはなをの明しふるくはるひの秋のくはる風 忠孝

源氏よころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや

わがあつめ家待りのかひも 巴

ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや

一 ころのや

秋回ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや ころのや



一 ことわりそとつりちり

なふゆ情のあはれさうらん

一 兼世多ふとあはれはくまほし ね 又兼波津もさうらのね ねん

月 月 ね 兼よとつりちりつりつりあそこの愛やかさうりねん

日 日 兼あつことわりみのみ後芽原うつたて忠れ兼もみあわ

川 川 兼 秋うういふあつたのさうりお兼もさうける神のあは 為重女

新 新 兼 兼あつし思ふ物とさうりに神もさうる兼のま川 有家

一 ことわりちり

日 日 兼あつし思ふ物とさうりに神もさうる兼のま川 有家

兼 兼 兼あつし思ふ物とさうりに神もさうる兼のま川 有家

兼 兼 兼あつし思ふ物とさうりに神もさうる兼のま川 有家

兼 兼 兼あつし思ふ物とさうりに神もさうる兼のま川 有家

何ことわりちり

一 ことわり

秋 秋 兼あつし思ふ物とさうりに神もさうる兼のま川 有家

月 月 兼あつし思ふ物とさうりに神もさうる兼のま川 有家

兼 兼 兼あつし思ふ物とさうりに神もさうる兼のま川 有家

兼 兼 兼あつし思ふ物とさうりに神もさうる兼のま川 有家

兼 兼 兼あつし思ふ物とさうりに神もさうる兼のま川 有家

兼 兼 兼あつし思ふ物とさうりに神もさうる兼のま川 有家

兼 兼 兼あつし思ふ物とさうりに神もさうる兼のま川 有家

兼 兼 兼あつし思ふ物とさうりに神もさうる兼のま川 有家

兼 兼 兼あつし思ふ物とさうりに神もさうる兼のま川 有家

兼 兼 兼あつし思ふ物とさうりに神もさうる兼のま川 有家



















とて入はる三世の仏と云ふこととて名乗る雲は人々  
自れは<sup>年中の</sup>おぼやうと云の上ふひらの世のひらき<sup>きり</sup>  
とく祝

一 とうらふ市死ヲ訪人ヲ

秋の世よ今も虫の聲すあり我らひていかに  
佛よとてこの花とぬらうとついでのをよん

一 とうらふ市死ヲ訪人ヲ  
巻の巻よはきよとていづれはすむと月ひら

一 とうらふ市死ヲ訪人ヲ  
わさうやうの馬とてはらうとて記の巻よ  
神中抄云えそとつちかたれとていひ  
矢の根よ附きとて毒とありてとていひ  
おとといのなるる女也

一 とうらふ市死ヲ訪人ヲ  
わさうやうの馬とてはらうとて記の巻よ  
神中抄云えそとつちかたれとていひ  
矢の根よ附きとて毒とありてとていひ  
おとといのなるる女也

一 とうらふ市死ヲ訪人ヲ  
わさうやうの馬とてはらうとて記の巻よ  
神中抄云えそとつちかたれとていひ  
矢の根よ附きとて毒とありてとていひ  
おとといのなるる女也







持世  
とすすれ風のうらたき柳の糸はあつくされあけり  
後人  
とすすれ空方山道はあつらひもあつらせつる成  
坂基

とふ人わや那と物ありやう  
とふ人まはるく潤の神の

一 時辰

持世  
面影もあつらふるあつらふるあつらふるあつらふる  
後人

持世  
とす秋はあつらふるあつらふるあつらふるあつらふる  
貴之

持世  
とす秋はあつらふるあつらふるあつらふるあつらふる  
高の栞ハ

杜子美云感時花濺淚恨鳥驚心

軍記云軍陳 剋敵軍神ヲ薊請奉志時作リ

勝軍成節薊轉神ヲ送上奉ル典志ヲ勝上テリ

一 時辰

とす秋はあつらふるあつらふるあつらふるあつらふる  
定夜

一 時辰

とす秋はあつらふるあつらふるあつらふるあつらふる  
定夜

一 時辰

とす秋はあつらふるあつらふるあつらふるあつらふる  
定夜

一 時辰

とす秋はあつらふるあつらふるあつらふるあつらふる  
定夜

一 時辰

とす秋はあつらふるあつらふるあつらふるあつらふる  
定夜

とす秋はあつらふるあつらふるあつらふるあつらふる  
定夜

一 時辰

とす秋はあつらふるあつらふるあつらふるあつらふる  
定夜















全巻  
西の山にけしきありてはまのいさむらひのりかきあはれしむらひのりかき

一 山あはれ

山あはれしむらひのりかきあはれしむらひのりかきあはれしむらひのりかき  
年毎にきくものむらひのりかきあはれしむらひのりかきあはれしむらひのりかき

一 さじ 笛

民のきくさじの笛草はたはた盛れ

思ふゆかりありてはたはた盛れ 笛のきくさじの笛草はたはた盛れ

うらむさじの笛草はたはた盛れ 笛のきくさじの笛草はたはた盛れ

一 さじ 笛 日記記 書物

月も日もあるたはた盛れ 笛のきくさじの笛草はたはた盛れ

笛のきくさじの笛草はたはた盛れ 笛のきくさじの笛草はたはた盛れ

一 笛のきくさじの笛草はたはた盛れ

一 さじのきくさじの笛草はたはた盛れ

君のきくさじの笛草はたはた盛れ 笛のきくさじの笛草はたはた盛れ

伊のきくさじの笛草はたはた盛れ 笛のきくさじの笛草はたはた盛れ

いづれも笛のきくさじの笛草はたはた盛れ 笛のきくさじの笛草はたはた盛れ

馬伏よすけの笛のきくさじの笛草はたはた盛れ 笛のきくさじの笛草はたはた盛れ

笛のきくさじの笛草はたはた盛れ 笛のきくさじの笛草はたはた盛れ

一 さじのきくさじの笛草はたはた盛れ

いづれも笛のきくさじの笛草はたはた盛れ 笛のきくさじの笛草はたはた盛れ



徳京  
戸部御河をよほ流とすつてさきもみらけ流よほ  
全  
大井のりつ紅雲をよほつりもくところを流のりつともの  
とす

一 くら杯

海振川の河原をきくあつてつり流よわあのとわつて  
新神保  
條をも神を登りしめり川の石をよほつり  
ま  
とつ河乃河原を行く流よ馬石をよほつり  
一 くら唐

あつてつりつあつてつり人 唐の海をよほつり  
くら死つりつ唐をよほつり  
骨政云山中ニ女抱子泣テ立リ孝子ハ山ニ行ケル  
是を向て給女云世のまらりと幸にありまけ給入虎来ハ跡ヲ

食ひ子殺尤今食テ慈慈と云同流の何石瑞故

女云虎ヨリ至悪シ

唐とて射る矢の石りたる物とあつてつりつ  
けつれん流流物云去人唐流あつるその子也歳あり

十三ノ年まて虎と射んと給ふ子里れ給ふ

ゆくふれん虎りつわひと射るれも矢あつてつり

矢湯に虎やととんとつて虎りつ似つる石也一急のつ

りつふれり如形矢立つる心のつれつるつり

夜一の虎乃事とあつてつりあけつりつとつり

誰う今竹のやにい方をすつてつりつる虎も世あり

けつれつりつ石の菊云世と通つ竹林流よ何人有

又道ん流つるつりつ院よ通つ竹林





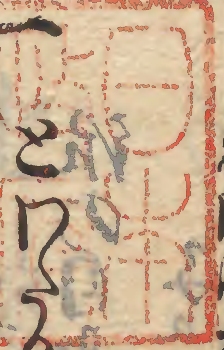






是ハ行折ト云フ也

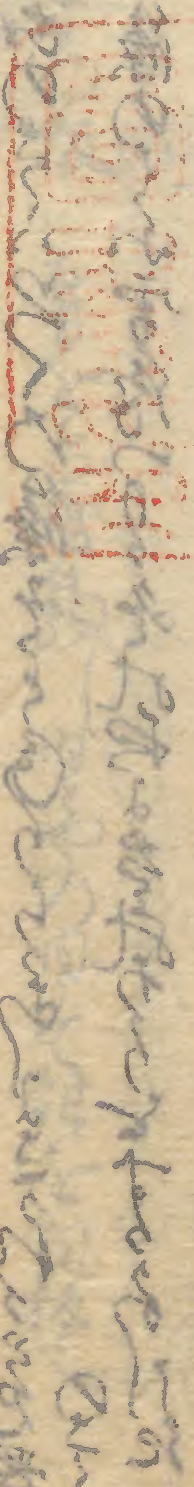
我門乃板井此清長里と云フ人ト云フ也



此の浦ト云フ所ト云フ也

一と云フ也

五物乃海法舟ト云フ也



此の浦ト云フ所ト云フ也

一と云フ也



